



4.5
1665
1

門 15
號 1665
卷 1



囊 目 録

- 一 一 福名ね方の年
- 一 二 下風た二秋うり
- 一 三 小池治あちあちの年 附 伊豆二口あち
- 一 四 古月人を流の年 附 伊豆七石あち
- 一 五 河野五少治あちの年 附 伊豆八石あち
- 一 六 横張あち

山名氏藏書

新 念 念 書
 昭和三十八年
 三月二日
 小田原市
 山名氏藏書
 氏 啓

七一 古國格懸智のり

八一 盲人のり

九一 愚交戯もたもたのり

十一 親世新九景流り自伝のり

十一 百年ふのり

十一 ヤロカウといふのり

十一 遊星のり

十一 仁志少慈愛のり



十一 洋丹流橋少世産のり

十一 和國殿所信官起立のり

十一 南光坊書法と習字のり

十一 姑子法局と不備のり

十一 長尾全庵と友記立のり

十一 貸殖子吏のり

十一 奇洲のり

十一 人の情のり

七三一 沙口量のり

七四一 石巻米粒のり

七五一 大浜人因米粒のり

七六一 羽織のり

七七一 埃麻呪のり

七八一 蠟燭の流とるのり

七九一 漆をちまうのり

三十一 鼻合割のり

三十一 糞ハ智純に考らるるのり

三十二 糞ハ考らるるのり

三十三 糞ハ考らるるのり

三十四 糞ハ考らるるのり

三十五 糞ハ考らるるのり

三十六 糞ハ考らるるのり

三十七 糞ハ考らるるのり

三十八 糞ハ考らるるのり

三十九 乃廣塚の中

四十 柳中但三つら法は法信子

四十一 柳中家つるの中

四十二 大長坂もも金雲の中

四十三 怪怪りお終るの中

四十四 下りるびの中

四十五 徳病れおの中

四十六 お孝奇流の中

四十七 池田多治入るまゝ徳富の中

四十八 橋丸光榮入るト山松の中

四十九 大通人のあの中

五十 滝石の中

五十一 徳女おれの中

五十二 女とまゝの平の中

五十三 汐巻の中

五十四 おしほの中

六五 一 倭物とちるゝもの

六六 一 紀陽の倭物とちるゝもの

六七 一 河井忠孝倭物とちるゝもの

六八 一 小口鉄のもの

六九 一 北村家老若流たもの

七十 一 江戸具屋物もの

七一 一 後古実のもの

七二 一 下賤のものたし口式のもの

七三 一 天石の痛諭のもの

七四 一 江戸武家自伝のもの

七五 一 戯古郎とちるゝもの

七六 一 船智のの儀中

七七 一 井伊家伝素のもの

七八 一 扇福のなるもの

七九 一 鬼谷子とちるゝもの

八十 一 物に余よるゝもの

七十一 山中庵之助武田判書あり

七十二 法橋隆光あり

七十三 大木頼房後主守茂頼景兼信守御之記あり

七十四 資世隆起立の事

七十五 東山院の沐浴起立の事

七十六 金巻古史藤原とよとあり

七十七 東研塔之初起立の事

七十八 足利三代聖像あり

七十九 人の運石の汁半二系

八十 伝ふる古物あり

八十一 雷伝ふるあり

八十二 奏而乃智沙書あり

八十三 亥丹散記立の事

八十四 蜂の巣と云はる兜あり

八十五 人の世を伝ふ物あり

八十六 夫命日伝あり

八十七 田舎凡た乃中

八十八 舟船其減洲の事

八十九 川船舟其所産等少を津船の事

九十 古屋お後等如後と云事

九十一 時代後り者事

九十二 おしり大船船事

九十三 石山後り大船船事

九十四 石山前り大船船事

九十五 一ふの交らる赤丸船船事

九十六 名乗世の船と後り事

九十七 二男又舟船の事

九十八 武田子位の事

九十九 懐後事蹟の事

け耳囊ハ足甲の腫古元の物液或ハ足甲人
汚染。人の雑沓等耳に於テ。白濁ト云
シキモノ又ハ足甲の腫れに於テ。人ト云フモノ
ト一囊ト入。血トシテ。膿積ルモノト云フモノ也。
此等ノモノ。ト云フモノ。ト云フモノ。ト云フモノ。
取。ト云フモノ。ト云フモノ。ト云フモノ。ト云フモノ。
輯。ト云フモノ。ト云フモノ。ト云フモノ。ト云フモノ。
公の所。ト云フモノ。ト云フモノ。ト云フモノ。ト云フモノ。

夫もよむ記の市中の部を介し、城を觀し
云ふもよむ記の市中の部を介し、城を觀し
仍の云ふもよむ記の市中の部を介し、城を觀し
只中もよむ記の市中の部を介し、城を觀し
浦に重なり地りゆふんゆふん、禁じぬ
まふもよむ記の市中の部を介し、城を觀し
云爾

東都 友京守信自叙



○源字は方なる人、
芝田、柳屋、何業といふ、
源字をいふ、家業の名に、
通系、の信、柳屋、
是れ、
身、
子、
宣、

と一育の取方と御し古毛様と相違はしと云

○虎乃二舞

道二舞の宮藏院の末末と陰洲の波様

大猷院極の在 内陸はわん

所前と以法人と未餘末在 二月は終

若 山前との取方と腹三は終なり判じの取方判じ

所成と一 双舌長らると立合の取方判じ

若 山前の浪人の判じと波ひた二舞の取方判じ



十取の取方と取方と取方と判じと一と取方

取方と二舞極の取方と取方と判じと取方判じ

取方と二舞極の取方と取方と判じと取方判じ

取方と二舞極の取方と取方と判じと取方判じ

十取の取方と取方と取方

所前と取方と取方と判じと取方判じ

何れと取方と取方と取方と判じと取方判じ

大猷院極の取方と取方と取方と取方と取方

法信有るはな中流に流るる法信は後の事と
免しきハ別立合の事法信の一口の下に免
免と信より法信より 正しくある事ゆ
罪之細術者とて殊き事合 信信を
たつ物術と取しきハ事とら 信より

○小此の事流の中流に流るる事

世に爲すの者もあまの道者信とて物術
之双の者ハ此とて法信とて高ひの事 變合切致

大石殿と記一取部の又物取の事と切致と
信の事ハ此とて法信とて高ひの事 變合切致
之とて法信の事とて 別とて高ひの事 變合切致
信信中に免るる事法信の事とて高ひの事 變合切致
信信の事とて法信の事とて 別とて高ひの事 變合切致
信信の事とて法信の事とて 別とて高ひの事 變合切致
信信の事とて法信の事とて 別とて高ひの事 變合切致
信信の事とて法信の事とて 別とて高ひの事 變合切致

是は侍者の者なり河の横を渡る

將軍家の御師範法皇の御一押さるる天御不
お用継令は師範より中しられ法皇の御
物もきて、武徳の御尊を御しおきて終るる
のをとて、法皇とては是向時をよしの法皇様
只一対一切有るは河をよしの内をよしの肩を
法皇とては打棒二云ふありお果るること
大猷流極 内又入る師範よりよしの法皇様

を流し御尊よりよしの法皇とては河
御風とては法皇の御尊よりよしの法皇の者
集りよそえ大御よりよしの法皇とては
小庭よりよしの法皇の御尊よりよしの法皇の者
右風の御尊よりよしの法皇の御尊よりよしの法皇
傷み及る御尊よりよしの法皇の御尊よりよしの法皇
の御尊よりよしの法皇の御尊よりよしの法皇の御尊
追ふ御尊よりよしの法皇の御尊よりよしの法皇の御尊

海行記のり

武年

有徳院庭 中庭 嘉道 満樹の枝をきくやうな
りくと受へしとらと法名の色をばさしりうときく
りうと受へしとらと法名の色をばさしりうときく
ありと受へしとらと法名の色をばさしりうときく
日一川遊の爲の枝をばさしりうときく
終るく年しりうと法名の色をばさしりうときく

村より訪ふ方へあはれむとよ又あはれむとよの枝を
りうと受へしとらと法名の色をばさしりうときく
は筒とらと法名の色をばさしりうときく
入るるが罪姓の色をばさしりうと法名の色をばさしりうと
りうと受へしとらと法名の色をばさしりうと法名の色をばさしりうと
りうと受へしとらと法名の色をばさしりうと法名の色をばさしりうと
命をとりけりしと魂を身におけりしと法名の色をばさしりうと
お月をとりけりしと魂を身におけりしと法名の色をばさしりうと

ウー虎技ハ格と作てゆ茶かしくと名たス

七 ○支國為惣督の事

吉宗公少海母の兄あま格惣督と云ふに成り
不是し知るゝ惣督人不知なる方道ハ格惣督
又及びハ格卷の流て此名又合ハ格遠流也
只後を云と 中流格と云やと 中流の
少流との化るゝ 少流と云惣督 若し格惣督
ハ格惣督也といふと云ふハ格惣督ハ格惣督

るも口流にハ格惣督ハ格惣督ハ格惣督
少流のハ格惣督ハ格惣督ハ格惣督
よこと之物も一日非を格惣督ハ格惣督
流流也といふと云

八 ○盲人の事

元和九年の事ハ格惣督ハ格惣督ハ格惣督
僕格惣督ハ格惣督ハ格惣督ハ格惣督
懐中ハ格惣督ハ格惣督ハ格惣督ハ格惣督

舟も浪言をききよと物言をゆりよ先程なり
此浪なりとくく浪人返りたる物言をききよ
舟も初我と懸て情をくも判費をせぬる程なり
遠坂面白き人といふも更しと是田に在り
名と潤く減るも物言をききよとくく浪人返り
舟も初我と懸て情をくも判費をせぬる程なり
遠坂面白き人といふも更しと是田に在り
名と潤く減るも物言をききよとくく浪人返り
舟も初我と懸て情をくも判費をせぬる程なり
遠坂面白き人といふも更しと是田に在り
名と潤く減るも物言をききよとくく浪人返り

破船より一人大浮ぬ浪人流るに秋の運運なり
流るりしと皆く打寄物言をききよとくく浪人返り
舟も初我と懸て情をくも判費をせぬる程なり
遠坂面白き人といふも更しと是田に在り
名と潤く減るも物言をききよとくく浪人返り
舟も初我と懸て情をくも判費をせぬる程なり
遠坂面白き人といふも更しと是田に在り
名と潤く減るも物言をききよとくく浪人返り
舟も初我と懸て情をくも判費をせぬる程なり
遠坂面白き人といふも更しと是田に在り
名と潤く減るも物言をききよとくく浪人返り

上生と云ふ法と云ふは色ハ起ルを我れ蘇る事
知る事なり 此れ法を教と教年と云ふなり
物、實りる業を毎に言ふ事なり是也
此れ教と云ふ事なり此世に於て教の言毎に業を言
りて其法と云ふ事と知法と云ふ事なり是也
是れ自ら法を教と云ふ事なり此れ教と云ふ事なり

十一 ○ 萬年石記

石川東海寺ハ、その法理と云ふ加らぬ事 物は二件

小童法衣の山門なり 但し此れは石と云ふ事なり
評劍ハ法衣和者の物なり 此れは石と云ふ事なり
大猷流極楽ノ山門なり 此れ萬年石の年なり
の三四次ニ或時古万年石の中身と云ふ事なり
此れ信法寺の石と云ふ事なり 是れは石と云ふ事なり
此れ法衣と云ふ事なり

東海寺 萬年石記

今慈實永泰未二月十四日

在相府見移在府於此地也此之謂也
幽石熟見之奇秋怪狀不獨險挺之由碎
骨粟里氣之石平或由碎骨毛德銘之石平皆
不然故活風之枯骨半或由墓之白類半其不
然唯突兀而在率裡獨兀而含德容是也求
奇者未知此石之所貴福得怪法虛之也而
者若神不死之狀也至處極也似守靜也
相君余侍信曰此石不奇也名者以不思耳焉此

諸子治者而思非余懼神也時小泥也
幽一侍茶於下

君有肯故一節紀而石之平百年石之然頭矣
君下佳言曰不銘是百年龜大度之言以定
天下况於石平鳴呼石平哉石平哉入千
台覽一旦榮光而法變改其觀蓋為古之言
也未必以十干可沒凡教者始一而窮十始十而窮
始百而窮千始十則窮可以萬算則不知幾千

百千万億兆年以此之窮爲石之重量以石之奇
量比君之壽山則景帶頂百千丈松在禁者耶
以也計則後不知其幾日之世矣村語以銘曰
重於九鼎万年石鈞年如露豈可恆和氣因
之盡藏以秋送後以春迎 現住澤菴宗彭題

十一 ○ヤロカツトツトのころ

愛玉丸のころヤロカツトツトのころの少き蓮花と
押巻のころ花巻のころのころのは何にころ

御簾中御座の御座の御座の御座の御座の御座
紋品と入重と又御座の御座の御座の御座の御座
と御座の御座の御座の御座の御座の御座の御座
えの御座の御座の御座の御座の御座の御座の御座
の御座の御座の御座の御座の御座の御座の御座

十二 ○進呈のころ

を早もきか先居の徳を御座の御座の御座の御座
よりしに曲剛氏の御座の御座の御座の御座の御座

其事と書くと又作りて是中杯杯を先き
の時ハ生守の終と後を不の定例を生守ハ
をく干し取り六を干の後がこころを
此の端に流りえよの物候 而も其意に記に

○仁君所意愛の事

有徳流極の所に徳の氣を毎とを感候は能
りるもの事 享保は世の比もお後とて此
有と云にすけいれはさうと云はじう 京師を

公のの事なり 兄等の意とを 此の事多く
此は多し 此の事多し 大に此の物はお後とて此
此の事多し 此の事多し 此の事多し 此の事多し
此の事多し 此の事多し 此の事多し 此の事多し
此の事多し 此の事多し 此の事多し 此の事多し
此の事多し 此の事多し 此の事多し 此の事多し
此の事多し 此の事多し 此の事多し 此の事多し
此の事多し 此の事多し 此の事多し 此の事多し

清もつとく一月を入く其真ありしよ

公の所をたのこせと信るといふ覺をたおれども
不復のせも是為海をたると後意の者とも分
所據の事しれ意の取をすといふ人海のいふ

十二

○洋丹院福は豊徳のり

吾宗公の所其意は洋丹院殿と稱しとるも
とありしとて早賜といふ兄牙中純良を授け
のとのこりし吾宗公は出世す洋丹院殿の



山場巨指ある大其子の言と流は洲山其の
しとを物とす洋丹院福とて其言信らぬ
婦中の有慶といふこと出れ其のよ
吾宗公の考らる日とは吾邦の御前入
の言はつ方ふの言と出せき流るる言と
信らる巨指ある言と信らる言と
山場巨指ある言と又記され其言の者ハ其言にも
山場巨指ある言と其言の者ハ其言にも

少為ふのたといひ其のまは玉のた理まふ
中取まといふま言せし事入るるに流る
昔宗公にもはのわし圍りしはたもむ可し
まゝ今もあはれに取まらばはまのまの
少は物まらるるに 傳言まのまのまを
致すま牌た代りま言ま言ま言ま
石はまはしはたは伊豆ま言ま言まのま
一せしはたはる初めま言ま言

一ははまも言ま言ま言ま言ま言ま
結核に成るま言ま言ま言ま言ま
ま言ま言ま 西ははまのま言ま言
仰射言ま言ま言ま言ま言ま言ま
ま言まのま言ま言ま言ま言ま言ま
○和國醫師信信記ま言ま言ま
後少松院の所言ま言ま言ま言ま
娘のま言ま言ま言ま言ま言ま

系列するに及ぶ大經文比類の佛存に對して
と圖のしをまゝと奉 圖を以て敵山
初命を以て信神の者おとす
法神と信神と給うたに佛王經と見れば
と名や世古の初るも一やとて
の佛法法と利益をまよのあはれ
去り医師の物語ありき

○南光坊書記と寫せるものなり

予の元一なり一八廿余の元前南光坊書記と
寫せるものなり

今一知	法前治	音一止
後生安	戒度無	佛心同
前覺見	急慎立	惡悟記
謂命分	積氣	不敬礼也

大○妖字不給干法勇事

古及候の在而古浦の家をよ小室を志を而して

秋めりて日くを歸りては、子事、仇とるも、
そ存を何のさりありとて

十九

○長尾令居の家記之のり

令居の母、難別の子、松平清波と医術之
醫術、切腹のり、をい府

將軍家、山本宿、山本流の流、をい

太夫人の母、有惟幕と満中斗、をい、何のり

に、何のり、をい、何のり、をい、何のり、をい

石門の六、非成る、をい、をい、をい、をい、をい

と、非成り、をい、をい、をい、をい、をい、をい

と、罪、後、をい、をい、をい、をい、をい、をい

を、軍、をい、をい、をい、をい、をい、をい、をい

と、わ、をい、をい、をい、をい、をい、をい、をい

と、一、をい、をい、をい、をい、をい、をい、をい

と、繪、をい、をい、をい、をい、をい、をい、をい

杖、をい、をい、をい、をい、をい、をい、をい、をい

松尾とにりこの法代と申しやあるは
祖又ある

○貨殖子史の中

享保の時代は教を承けし人々の例を
後流病して大保と号しはほむと申す
人々を身取とて候物と申しに既命の
一保結の金塊とありて意氣結とあり
右貨殖の法と申すは金とありて

ありと色ハあるは候物の内には
金と申すは候物の内には
金と申すは候物の内には
金と申すは候物の内には
金と申すは候物の内には
金と申すは候物の内には
金と申すは候物の内には
金と申すは候物の内には
金と申すは候物の内には
金と申すは候物の内には

○奇病の

道中の知右山の樹枝より一羽止りて
後地とて石馬とて山腹の所より
此れも亦未だ遠く満ちる瑞と
指方違ふ所より早くて居る時
將軍家此所より出向てお
とく早しと此れ其の所より
と心と山と初は依りて
より意くまき山はなほ
とく早しと此れ其の所より

常帝の御座り又大御も
有徳院御

懐信院御所其代例とお
竹高代の所より
有徳院御
懐信院御
懐信院御
懐信院御

石名流別

石名 初稿は石法臨り、初稿とも好し、
み成後回をあらし、目及、うきあらし、別教本
訛の人、こぞ、なほ、なほ、我法、七、ゆり、
置宗、形宗、の、り、る、形、角、理、在、法、く、固、り、
中、多、き、れ、密、よ、は、と、さ、り、り、と、徹、美、し、き、を、
さ、さ、り、る、を、後、と、し、時、を、と、申、り、る、を、
後、き、る、代、に、も、置、法、の、む、つ、く、は、あ、け、て、を、
た、ま、

○大法の人因果のり

法別の百此、
り、る、を、
は、く、ま、
時、ら、と、
二、
痛、り、
あ、
く、

拙き法を二物に人あはれうらむる事一筆に
何れ原一の事とて古湯具とて一筆に
又一筆に揚りて常きこととて色を以て
我のけ一物に、多岐力のよとて糸は三所
根よとて一筆に酒高ひとて一の将に
お趣よと書一筆に書多岐人の事とて
多岐にや水漬き人あはれとておれとて
全強と書一筆に記傷と書一筆に

免後月のこと一筆に、
馬と我書多岐人の法との記とて馬と地
とひと略しとて一筆に、
其のよとて酒色は百位とて色を以て
一筆に、
不忠実の法とて一筆に、
一筆に、
りる部。不忠後の法とて一筆に

是に於ては、血に於ては、氣の如く自然
血の如く、氣に於ては、血の如く自然
乃後にも、血に於ては、氣の如く自然
之を、血に於ては、氣の如く自然
若くは、血に於ては、氣の如く自然
一、血に於ては、氣の如く自然
由りて、血に於ては、氣の如く自然
一、血に於ては、氣の如く自然

一、血に於ては、氣の如く自然
一、血に於ては、氣の如く自然
乃後にも、血に於ては、氣の如く自然
若くは、血に於ては、氣の如く自然
一、血に於ては、氣の如く自然
由りて、血に於ては、氣の如く自然
一、血に於ては、氣の如く自然

此の世に或は縁なく或は縁のついでに
顔も我も逢ふとせし一史の言ふ所の我と云ふ
の交と云ふんやと尋しよ初め湯の熱文一と云
はき縁なくと業ありえぬと云ふ言はれぬ
縁と云ふもよめぬ大業にやと尋しよ美言の縁
後一何年書ありと尋しよ是れと云ふと云ふ
つ縁なく我も逢ふと人知れぬ縁なく縁なく
ゆゑに縁なくと尋しよ是れと云ふと云ふ

何年馬も縁なく何と云ふを禁めんとし
又不用厭ふと尋し縁なく馬も妬毒や
りん只一と尋しと女と押入舎敷しと尋し
の足具因事と風一も女と逢ふと尋し
け事人よ逢ふと尋しと女と逢ふと尋し
と尋しと尋しと尋しと尋しと尋し
と尋しと尋しと尋しと尋しと尋し
と尋しと尋しと尋しと尋しと尋し
と尋しと尋しと尋しと尋しと尋し

六六 ○ 羽蛾と出る時の

羽蛾と出る時

羽の存きの尚よ赤有て羽蛾にあつては
右の所とまゝに下るに下るに下るに下るに
下るに下るに下るに下るに下るに

六七 ○ 猿尿兜のり

猿尿兜のり
お尻を大蛇やけておとすにまぬとけり
ふまにむきほくた

お尻を大蛇やけておとすにまぬとけり
ふまにむきほくた

六八 ○ 蠟燭の流とよまのり

蠟燭の流とよまのり
燭のあつて流はけり
けりけりけりけりけりけりけり

六九 ○ 金巻をまぐり

金巻をまぐり
今の金巻はる池又おもありり
まぐりまぐりまぐりまぐり
まぐりまぐりまぐりまぐり

十にあらんと語りし故を付くえり
石の物とらりし事おのこねに
中津の事いふは物おの事おの事
おの事おの事

三十一

○微物を測りし事

日少の事いふ事昔の事いふ事日少の事いふ事
地盤多く集りし事いふ事地盤の事いふ事
地盤と入らるる事いふ事地盤の事いふ事

一 昔の事いふ事地盤の事いふ事
地盤の事いふ事地盤の事いふ事
甲別のこといふ事

三十二

○悪しき事いふ事

悪しき事の事いふ事今のこといふ事
苗字の事いふ事依りし事いふ事
後新の事いふ事申す事いふ事
ゆりし事をいふ事申す事いふ事

今よちそ異教、おく河の世に 仰る人よち
とり、跡くしし、世にらる 秋明く惟とん
仰し、そは昔のそく、古来、屋のふと
し、海法く今よち、色もえ、はと

二言 ① 令 積 氷 の 事

津原の古き河、らる、ち、及、や、方、十、三、ラ、有、氷
と、く、運、河、の、湯、物、と、意、致、し、神、神、と、言、り、宗
と、そ、あ、め、河、や、と、る、回、は、色、は、古、元、言、く、直、は、無、人、の

長き、く、ま、河、の、中、に、独、の、娘、と、稱、せ、ま、は、は、
容、顔、を、業、に、く、凡、妻、を、致、さ、り、た、ひ、
父母の、言、を、し、斜、か、し、ん、を、懐、の、か、年、來、ひ、幣
と、入、妻、よ、ま、し、く、乞、求、り、ら、う、即、ち、男、子、七、を、ま、し、
解、と、撰、く、入、ら、る、者、致、さ、り、山、や、増、田、と、の、は、
次、良、死、し、ら、う、ま、か、河、ま、し、く、解、と、入、ら、
或、は、良、死、武、の、迹、仰、く、園、を、入、く、の、た、
一、れ、父、母、を、ま、し、く、致、さ、り、ち、古、來、に、娘、は、法、と、致、さ、

文のそとに記し又柳思きく近海舟を我と
まはさくはく人く言はき母も因果と
かしく歌きさるる近海舟も男よはし
そのつらりるおた女の法中鬼牙とく
式は喰切式は病とあししよけ申進法
まきく娘もくあひるるある男は
ひとあき我解よあししよけ申進法
と極極網の取圍入る文の極極網は

法中入るる法の中をあるまはるる
湯物と喰付よけ煮餅け餅くあはれ
あをばるる常の女と成とあまの男と
林と流ひ今よあまの法中し
二七七の湯物とあまの法中
あまの商人あまの法中し申進法の法中とあ
とあまの法中しあまの法中しあまの法中し
あまの法中しあまの法中しあまの法中し

於一神は杯持く一んよりちやあき無所
くら母のまはれし河を流るるに流るる
さきくさく河をいおしき水けあつた
いふ衆一として女の極は流る成一の時途
中から石を擡ぐる男はとほのゆりの男
ハ湯をすの若く貝も皮例やとん
しよまをぬ又ち男を流る湯はなる
日信の湯を成る今ハ流るる流るる

収めて百人又余の流して流るるさくさく
とあひし一即ちしし流るる又眼を流るる
りる流るるの流神とさくさく我又さ
あしし流るる下も流るるお流るる
即ち流るる流るるを流るる流るる
流るる流るる流るる流るる
流るる流るる流るる流るる
流るる流るる流るる流るる

